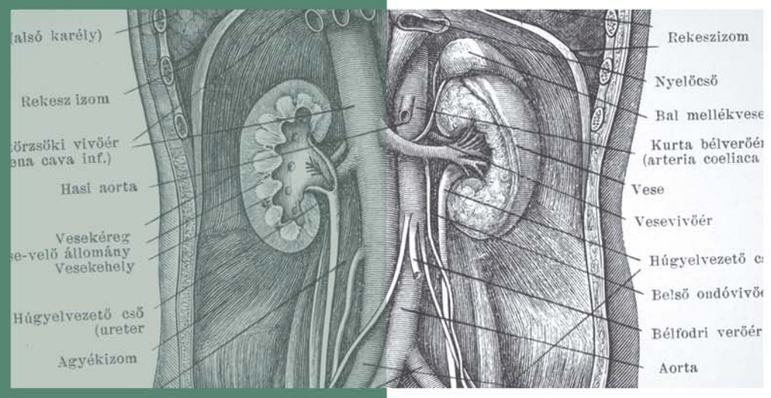
QUARTERLY REPORT

vol.52

Mar.2018

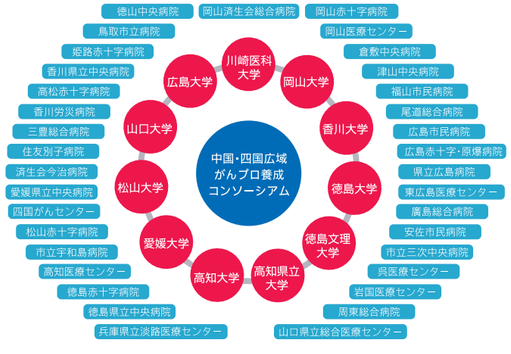


MANAGING OFFICE
2-5-1, SHIKATA-CHO, KITA-KU
OKAYAMA 700-8558 JAPAN
PHONE:086-235-7023 FAX:086-235-7552
http://www.chushiganpro.jp/

Mid-West Japan
Cancer Professional Education Consortium
中国・四国広域がんプロ養成コンソーシアム

中国・四国広域がんプロ養成コンソーシアム

中国・四国地域に位置する11大学がコンソーシアムを形成し、各大学院に多職種のがん専門医療人養成のためのコースワークを整備し、これに地域の35のがん診療連携拠点病院が連携することにより、広い地域にムラなくがん専門医療人を送り出すことを目的としています。



中国・四国全域に広がる拠点病院
組織的・効率的ながん治療の均てん化の実行組織
:コンソーシアム参加がん診療連携拠点病院

コンソーシアム参加がん診療連携拠点病院
参加大学・がんセンター

ごあいさつ

平成29年6月に、中国・四国地域の11大学が連携する「全人的医療を行う高度がん専門医療人養成」プロジェクトが文部科学省の「多様な新ニーズに対応する「がん専門医療人材（がんプロフェッショナル）」養成プラン」に採択されました。

本事業は、がん医療を取り巻く状勢変化に伴い生まれる多様な新ニーズにも対応するがん専門医療人の人材育成を目的としております。がん患者数の増加、治療の進歩に伴い高齢者医療、ゲノム医療、希少がん、小児／AYA世代がんへの対応は新たな重要課題となっており、中国・四国地方においても高いレベルでそれらを理解し、適切な医療を提供できる医療人の養成が必要とされています。さらに、がん患者の求める全人的医療を実践するためには、各々が高度な技術と知識を持った上で、チームとして連携し、がん診療を提供する多職種連携教育が重要となります。

本事業では中国・四国の11大学が参画するコンソーシアムを組織し、上記課題に対応できる卓越したがん専門医療人の人材育成にあたります。

当コンソーシアム事務局では、講演会、国内外の施設への研修など、コンソーシアムの活動情報を広く発信することを目的としたクォータリーレポートの発行を行っています。

本誌をきっかけに、大学院入学や各種セミナーへの参加等をご検討いただければ幸甚に存じます。

中国・四国広域がんプロ養成コンソーシアム
事務局

Column

「当科における食道癌治療の取り組み」

山口大学大学院医学系研究科　消化器・腫瘍外科学講座
兼清 信介

人口140万人の山口県では、毎年340人前後の方が新たに食道癌と診断され、170人前後の方が食道癌で亡くなられています（山口県のがん登録）。罹患率と死亡率は共に、全国平均と同程度の水準にあります。その中で当科では年間約30例の食道癌手術を施行しています。2008年以降、侵襲の高い食道癌手術に対して、胸腔鏡下手術（腹臥位）を導入し、その比率は年々増加傾向であり、近年では8割以上の症例で胸腔鏡下手術を施行しています（図1）。当科における検討（Kanekiyo S, Surg Endosc. 2017 Oct 26）では、胸腔鏡下手術は開胸手術と比較して、術中出血量や術後肺炎が少なく、また術後の白血球数、CRP、炎症性サイトカイン値（IL-6、IL-10）が有意に低い結果であり（図2）、侵襲や合併症を低減させうる事が示唆されました。さらに術後肺炎を発症した症例は有意に予後不良であり（図3）、低侵襲で合併症の少ない胸腔鏡下手術は今後食道癌の標準術式になりうると考えます。

さらに、当科では食道癌を含む消化器癌の治療成績向上のために、新規免疫療法の開発も積極的に行っています。ペプチドワクチン療法の効果を予測するバイオマーカーの探索・同定や、山口大学免疫学講座と連携で免疫疲弊の解除に着目した新たな複合癌免疫療法の開発を行ってきました。また、産学連携により日本電気株式会社の最新のエピトープペプチド探索技術を用いてマルチHLA（HLA-A*2402, -A*0201, -A*0206）結合性ペプチドの同定も行っています。2016年からは、医師主導治験として「進行・再発固形癌に対するHSP70/GPC3由来ペプチドと新規アジュバントの複合免疫療法第I相臨床試験」を開始し、現在は症例集積を終え追跡期間中です（図4）。

食道癌は未だ予後不良な疾患の一つですが、一つ一つの治療モダリティーの質を高め、また新規治療を開発することにより、集学的治療というまさに総合力でこの難病を克服していきたいと考えています。

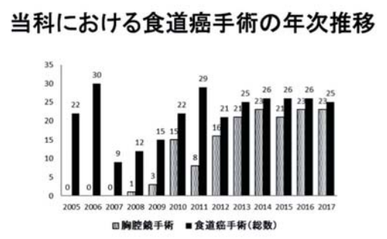


図1

図3

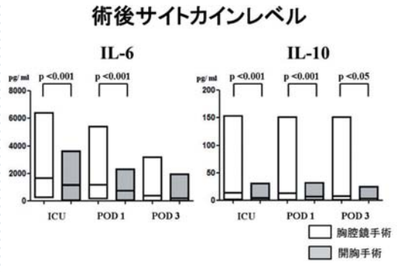


図2

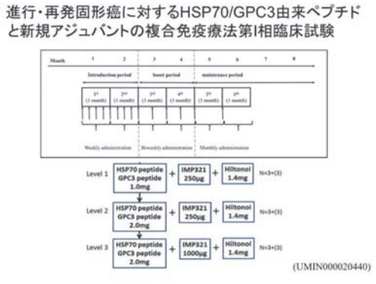


図4

Column

「がん治療における専門薬剤師の重要性」

広島大学病院　薬剤部
松尾 裕彰

近年の医療技術の発展や新しい抗がん剤の登場により、がん薬物療法は急速に高度化しており、専門的知識を有する多職種によるチーム医療なくして実施できません。また、がんゲノム医療中核病院の指定がはじまるなど、がん治療における個別化医療体制整備が進んでいます。今回、がん医療における専門薬剤師の役割と本年度広島で開催した研修会を紹介します。

がん治療は、手術、薬物治療、放射線治療の中から2つまたは3つの治療を組み合わせて行われる集学的治療です。患者のperformance status（PS）、腎機能・肝機能、およびエビデンスの有無などを考慮してどの治療を組み合わせるか決定します。抗がん剤を用いる薬物治療は、患者への負担が大きいため、効果や副作用に加え、根治を目的としているのか、あるいは延命や症状の緩和を目的としているのかを十分に説明し、過度な期待を与えることの無いように治療の内容と目的を十分理解していることを確認した上で実施することが原則です。基本的に、抗がん剤、輸液、制吐剤、インフュージョン・リアクションの予防薬をそれぞれどのように使用するか、薬剤の種類や量、投与期間などを示した治療レジメンのなかから、患者に最も適切なレジメンが選択されます。

抗がん剤は、殺細胞性抗がん剤、ホルモン療法薬、分子標的薬が用いられてきました。最近、免疫チェックポイント阻害剤が使用できるようになり、治療法が大きく変化しています。また、経口の抗がん剤や外来で点滴治療可能なレジメンも増えています。抗がん剤や治療環境が変化しても、抗がん剤の副作用はこれまで同様に出現するので、初期症状や発現時期などの情報を患者にきちんと伝えるなど早期発見のための対策が求められています。さらに、近年PMDAにおける新医薬品の審査期間は米国FDAと同程度まで短くなっています。つまり、海外においても使用例が少ない抗がん剤が本邦で先行して患者に使用されることが増えてきており、これまで以上に潜在的な副作用に対する注意が必要となってきています。

このようにがん薬物治療は高度かつ複雑化しており、がん治療における薬剤師の役割は益々重要になっています。レジメンは、根拠に基づいた抗がん剤治療を実施する為に必須であり、医師と薬剤師の協働で作成します。個々の患者におけるがん薬物療法は、登録レジメンに基づいて実施され、薬剤師が個々の患者にとって最適な治療計画となっていることを確認します。抗がん剤の曝露は、閉鎖式器具、安全キャビネット、個人防護具を用いるなど薬剤師が中心となって対策を行います。患者に対する効能や副作用の説明は、薬剤師と看護師で協働して行います。治療効果や副作用のモニタリングは、がん医療提供チームの一員として薬剤師も実施します。

近年、がん薬物療法および副作用に対する支持療法の発展により、外来（通院）にてがん薬物療法が行われることが増えてきました。それに伴い、診察日に来院した患者が必要な検査を済ませた後、薬剤師の診察において、患者の現在の状態や治療効果を評価し、主治医に対して、支持療法の追加、追加検査、抗がん剤の減量などのレジメンの変更、治療実施の可否、緩和ケア移行などを提案する、いわゆる「薬剤師外来」が全国的に拡大しています。さらに、外来治療の場合は保険薬局薬剤師の関与が適切な治療の実施に重要です。

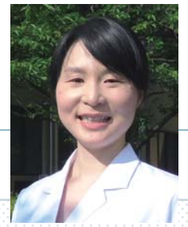
これらの薬剤師に求められている責務に応え、安全で質の高いがん薬物療法を提供する体制を構築するためには、専門知識に長けた薬剤師を継続して養成しなければなりません。広島大学では広島県病院薬剤師会や広島県薬剤師会との共催で、がん化学療法に必要な高度先進的な知識の習得を目的に、がん専門薬剤師養成のための研修会を開催しています（下表）。がんプロ養成コースの学生、薬剤師、薬学部生が参加できます。平成30年度も計画していますので、興味のある人は是非参加してください。研修会をきっかけに、がんプロ薬剤師養成コースに参加する大学院生が増えることを期待しています。

平成29年度全人的医療を行う高度がん専門医療人養成共催研修会（広島）

日付	研修会名・演題・講師	参加者数
2017年5月27日	第7回広島がん薬物療法セミナー 「胃癌の診断と治療」 市立豊中病院 消化器外科 部長 今村博司先生	137名
2017年9月9日	第8回広島がん薬物療法セミナー 「泌尿器科癌に対する薬物療法」 広島大学大学院医歯薬保健学研究院 腎泌尿器科学 准教授 亭島淳先生	109名
2018年2月3日	第9回広島がん薬物療法セミナー 「がんの痛みの診断とがん疼痛症候群について」 地方独立行政法人 佐世保市総合医療センター 緩和ケア科 診療科長 冨安志郎先生	103名
2018年2月7日	がんサポーティブケアセミナー 「みんなで学ぼう制吐療法！ ～最新のエビデンスから考える～」 愛媛大学医学部附属病院 薬剤部 薬剤主任 河添仁先生	87名
2018年2月15日	第5回南区勉強会 「胃がん薬物治療の最新の話題」 広島大学病院 消化器外科 診療教授 田邊和照先生	57名

Column

「Palliative Oncologyとの出会い」



香川大学医学部附属病院　がんセンター
（緩和ケアチーム身体症状専従医師）　村上 あきつ

皆さん、Palliative Oncologyという言葉をご存知でしょうか？私がこの言葉に出会ったのは、昨年の6月でした。その2ヶ月前、縁あって腫瘍センター（現在はがんセンター）に所属する事になりました。新しい所属先の長に、「緩和ケアをする人は、がんのこと、その治療のことをもっと知らなければいけません。ぜひここでそれを学んで、がんのマネージメントができる緩和ケア医を目指してください。」と、励ましの言葉とともに迎え入れていただきました。元々麻酔科を基盤として緩和ケアチームに携わっていたので、がん薬物療法に関してはとことん無知。カルテに並んだ抗がん剤のレジメンのアルファベットが、正直なところ暗号にしか思えませんでした。実際、初めのうちはそのアルファベットの意味することや抗がん剤の種類など、学生時代からほとんどアップデートされていない知識を更新するのに必死でした。

そうこうするうちに、出会いの日はやってきました。所属長の勧めで、6月16、17日に札幌で開催された『第2回がん緩和ケアに関する国際会議』に出席しました。香川からの子連れ移動、しかも翌週は横浜での緩和医療学会のポスター発表を控えていたので、内心、スケジュールをこなすのがツライ…と思っていました。しかし、いざ会議に参加してみると、各国首脳会議かと思うほど緩和医療の分野では超が付くほど著名な先生方が世界中から勢揃いしているではありませんか。会議期間中は、ずっと鼻血が出そうなくらい興奮していました。特に興味を持って聴いたのが、『The future of palliative oncology, 緩和腫瘍学の将来』というシンポジウムでした。この時までPalliative Oncologyという概念を知らなかったのですが、ちょうど今自分がそれを実践していく立場にあると感じ、自然とこのテーマに惹かれていきました。緩和ケアと腫瘍学の統合についての講演は、経済的な影響や遺伝子に関わる問題など、多岐に渡る論点で構成されていました。その中で、Dr. Thomas J. Smithの『オンコロジーケアの領域において、オンコロジストが実践できる緩和ケア：TEAMアプローチ』は、緩和ケアの院内教育をどう進めていくべきか模索していた（今も模索中ですが）私に大きなヒントを与えてくれました。Dr. Smithが提唱しているTEAMアプローチとは、「プライマリー緩和ケア」というべきケアの要となる基本的な概念を、TEAM（T：time, E：education, A：formal Assessment, M：management）という4つの要素で構成するアプローチです。例えばT：timeには、「ひと月に1時間、これまでより多く医療従事者による緩和ケアに関する面談時間を取りましょう。それを毎月続けましょう。」という内容が含まれています。ひと月に平日が20日あるとして、60分を20日で割れば1日3分！です。しかも実践するのは医師のみならず、看護師や他のスタッフでも構わない、むしろadvanced practice nurse（上級実践看護師）の方が医師よりも良いかもしれないとあります。時間配分の一案として、看護師30秒、医師30秒、薬剤師30秒、栄養士30秒、理学療法士30秒、メディカルソーシャルワーカー30秒で合計3分。これなら激務の合間のティータイムはこれまで通り維持しつつ、良質な緩和ケアの実践に近づくことができそうです。TEAMアプローチについて詳細をお知りになりたい方は、ぜひ米国臨床腫瘍学会(American Society of Clinical Oncology (ASCO))のEducational Book 2017を覗いてみてください。

さて、医療従事者、特に医師への緩和ケアの普及には、経験年数の浅い医師を対象とした草の根運動が重要だと考えています。ある時、私の所属する緩和ケアチーム内でも、彼らが5年後、10年後に緩和ケアの実践者となっていくことで、ケアの底上げができるのではないかという議論がありました。緩和ケアの学生教育が盛んな大学もありますが、この点において、残念ながら当院の研修医は十分な卒前教育を受けてきたとは言い難い状況でした。そこで2017年12月に、院内で初めて初期臨床研修医向けの1コマ30分のセミナーを2回シリーズで行いました。1回目の講義は緩和ケアの歴史の話から始めました。そして前述のTEAMアプローチを一部改変して、研修医としてすぐに実践できそうなコミュニケーション（患者さんの話を傾聴する、患者さんの希望を尋ねる、メディカルスタッフとよく話す、など）を例として提示してみました。2週間後、研修医に1回目の講義を踏まえて何かやってみましたかと尋ねると、予想以上に多くの人が傾聴などを実践していました。非常に嬉しい驚きを覚えるとともに、緩和ケアの未来はきっと明るいぞと感じました。この研修医たちの中には、将来がんと関わりながらキャリアを積んでいく人もいるでしょう。いつか彼らに、緩和ケアが患者・家族のQOLを向上させるものに留まらず、様々な困難にぶつかった時に自分たちを支えてくれる考え方や知識であることに気づいてもらえること、そして自然と緩和ケアを診療の中に組み込んでいってもらえることを願っています。もしそうなれば、わざわざPalliative Oncologyなんて言わなくても良くなるのかもしれません。

緩和ケアにしても腫瘍学にしても、私はまだまだ修行中の身ではありますが、緩和ケアの世界から腫瘍学の世界に飛び込んでみることで、これまでにはなかった視点を持てるようになったと実感しています。Palliative Oncologyとの出会い、それは深みと豊かさあふれる緩和ケアへの誘いだと信じてやみません。

Working group

平成29年度 第1回がん高度実践看護師WG講演会開催

がん患者のライフステージの様々な新ニーズに応える高度な看護実践の展開
～小児がんの治療と高度な看護実践～

日　時：平成29年12月10日（日）13:00～16:35
場　所：高知県立大学永国寺キャンパス教育研究棟　A211講義室
参加者：35名

総合司会（主催者）：藤田 佐和
講演会司会：有田 直子

主催者：藤田先生の挨拶

司会：有田先生の挨拶

平成29年度から新たにスタートしたがんプロⅢ期のがん高度実践看護師WGでは、全体テーマを「がん患者のライフステージの様々な新ニーズに応える高度な看護実践の展開」とし、5年間にわたり各大学ごとに、がん看護インテンシブコースⅡの講演会を企画していきます。

高知県立大学では、平成29年度は「小児がんの治療と高度な看護実践」をテーマに、小児がんの治療についての基本的な知識や、治療を受けながら生活している子どもの成長発達を支える看護についての講演会を開催し、お二人の講師の先生をお招きしてご講演いただきました。

【講演者】

・西内 律雄 先生
　高知県・高知市病院企業団立高知医療センター　小児科部長
　「小児がんの治療の現状と課題」

・笹木 忍 先生
　広島大学病院　小児看護専門看護師
　「小児がんを持つ子どもの成長・発達を支える看護実践」

講演の様子

講演の様子

【終了報告】

高知での開催でしたが、中・四国の鳥取、愛媛、香川から小児がん看護に関心の高い35名の方の参加がありました。専門職の看護師、養護教諭、看護教員、保育士だけでなく、小児がんの子どもの親、がんで治療を受けたサバイバーにご参加いただき、子どものケアに関わる者同士で有意義な意見交換ができました。

講演を通して、小児がん治療の現状について学びを得ることができ、看護師としてできること・取り組まなければならないことが何かを改めて考える機会となりました。また、小児がんの子どもへの看護では、発達段階に応じた関りや子どもたちの今後の生活や人生を見据えた長期的な関わり、そして子どもとその家族が困難を乗り越えていく力を引き出し、支援していくことの重要性を再認識することができました。

参加者からは、「今後自分が関わる小児がんの子どもたちに対して講演会での学びを実践していきたい」「子どもへの説明の仕方など、具体的な対処方法がよく分かった」「医療と連携して子どもの学力を含めたQOLの向上に努めていきたい」「小児がんの子どもを医師や看護師が連携してサポートしている様子がよく分かった」などのご意見をいただき、参加者のニーズに応える有意義な講演会となりました。

【全体のサマリー】
西内 律雄 先生

日本における小児がんの新規発生は、年間2000～2500人程度という希少がんであり、高知県内でも年間発生率は11人程度と少ないことが説明されました。また、小児がんにおいて最も多いのが、白血病・骨髄増殖性疾患・骨髄異形成症候群で39%を占めており、このうち65%を急性リンパ性白血病、23%を急性骨髄性白血病が占めていることが説明されました。第2位が頭蓋内／脊髄内腫瘍で15%を占め、第3位がリンパ腫・細網内皮性腫瘍で、このうち非ホジキンリンパ腫が54%を占めており、、第1位～3位のみで小児がん全体の約2／3を占めていることがデータとともに説明されました。

西内 律雄 先生

次に小児がんの治療の現状について説明されました。小児がんは症例数が少ないため、治療を受けられる施設が少数の施設に集約化されていますが、患者ができるだけ慣れ親しんだ環境で治療・療養生活を送れるように、小児がん拠点病院と治療をしている病院とがネットワークを作り、連携協力をして患者に最適な治療が提供できるように努力していることが説明されました。また、一施設や一大学と関連病院だけではエビデンスに基づく治療法を開発することは困難なため、全国的な多施設協働研究が必要であり、現在は全国規模での臨床試験を行う体制が造血器腫瘍についてはほぼ整い、固形腫瘍についても整備されてきており、治療成績の向上に向けた取り組みがなされていることが説明されました。

講演の様子

そして、急性リンパ性白血病の治療について欧米での治療の歴史も踏まえた説明がされました。これまでの治療成績の向上は、1980年代までに開発された古い薬剤の組み合わせの最適化などにより達成されてきましたが、今後のさらなる向上のためには、新たな薬剤が必要です。しかし、成人とは異なり製薬会社主導の新薬開発が進みにくいといった問題があるため、新薬の承認に向けた法制度の整備や、グローバル治験での承認への道が求められることが分かり、小児がんの治療について、知識を深めることができました。

【全体のサマリー】
笹木 忍 先生

講演では、①子どもへの説明のヒント、②症状マネジメント、③教育支援、④長期フォローアップ、⑤家族・きょうだい支援についてお話いただきました。

笹木 忍 先生

子どもへの説明のヒントでは、子どもの発達段階に応じた言葉や方法を用いたり、説明する場の環境に配慮するといったポイントが説明されました。子どもたちが自分の体のことをよく知った上で治療や人生に対して前向きに取り組んだり、家族・医療者との信頼関係を築いていくためには十分な説明が不可欠となります。そのため、説明する側は事前にいつ・誰がどのように伝えるのかを考えておくことや、子どもがどのような質問をするかをイメージしておく必要があることが事例を用いて説明されました。また、子どもの力を引き出す技術としてプレパレーションの説明がされ、病気に関連して生じる子供の不安や恐怖を最小限にし、子どもの対処能力を引き出す大切さを学ぶことができました。

症状マネジメントでは、子どもは症状を過小評価することが多いことや、子どもが症状を訴える表現には、言葉通りの意味以外にも伝えたい内容が含まれている場合があることが述べられました。そのため、看護師には症状に対するアセスメント能力を高め、専門的知識、最新の知識・技術を身につけ、的確に対処できる能力が求められることが分かりました。

講演の様子

教育支援では、広島大学病院での復学支援を例にした実際の活動が紹介されました。そして小児がんの子どもの復学に関する課題として、原籍校側に受け入れに対する戸惑いがあったり、目には見えない内部症状の把握が困難なため、学校側に理解してもらいにくいこと。また、退院後も治療の継続が必要な場合には、学校との連携や調整が必要になることや、高校生に対する入院中の教育・復学支援が難しいことなどが説明されました。

長期フォローアップでは、成長発達にある子どもたちは治療後の人生も長いため、治療をしている今現在だけに目を向けるのではなく、今後の治療や晩期合併症への対応、ライフイベントに合わせた関わり、病気や症状に関する説明の時期などについて長期的に見ていく必要があることが説明されました。そして、退院後も子どもたちが困った時や不安なときにいつでも相談できるような場所を作っておく必要があることが分かりました。

家族・きょうだい支援では、小児がんの子どもはそのきょうだいも子どもである場合が多く、家族みんなに環境の変化や心境の変化が生じるため、医療機関のみならず、地域・学校・行政が連携し、多職種がチームとなってサポートしていく必要があることが分かりました。そして、子どもたちや家族はあらゆる困難を乗り越えていく力を持っているため、看護師はその力を信じ、力が発揮できるような支援をする重要性を再認識することができました。

【参加者アンケート結果】

アンケートの結果（回収率85.7%）、96%の参加者が「小児がんの治療の現状と高度な看護実践」について具体的に分かったと回答され、参加者全員が講演内容に満足したと回答していました。また参加者のうち、看護師が67%、養護教諭16%、教員・保育士・小児がんの子どもの親が4%と、専門職だけでなく子どもの医療・教育・保育に携わる様々な立場の方が関心を持って参加されており、参加者のニーズに応えることのできた講演会であったと考えられました。

また参加者は「がん看護に関する知識が増えた（31%）」「がん看護に対する興味・関心が高まった（18%）」「今の仕事とがん看護を関連付けて考えるきっかけとなった（18%）」「がん看護に対する視野が広がった（14%）」と回答しており、小児がんを持つ子どもへの高度な看護実践を考える上で、明日から活用できる知識や技術を含む充実した内容であったと考えられました。今後も、参加者の高度な看護実践につながるような講演会の企画を考えていきたいと思います。平成30年度は、“AYA世代の人々とがん看護に関連したテーマ”での講演会を予定しております。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

文責：高知県立大学大学院看護学研究科　藤田 佐和

Activity report

活動報告

岡山 第9回 岡山大学医学物理コース(インテンシブ)地域連携セミナー

日　時:平成29年10月28日(土)　18:00～20:00
場　所:岡山大学大学院保健学研究科　総合教育研究棟8F　リフレッシュルーム
参加者:5名

座長:岡山大学大学院保健学研究科　笈田 将皇

「放射線治療品質管理基礎技術19(3次元原体照射)」
「放射線治療品質管理基礎技術20(強度変調放射線治療)」
岡山大学大学院保健学研究科　笈田 将皇

フリーディスカッション

終了報告

本セミナーはインテンシブコースとして前年に続いて、公開講座として市内の関連病院や院内スタッフ・大学院生等を対象に、海外の教科書(Physics of Radiation Therapy)を用いて系統立てたセミナーを企画しています。今回のセミナー企画は第9回目であり、第8回に引き続いてChapter 19・20を中心に、3次元治療計画技術、治療計画の線量計算アルゴリズム、IMRT計画・照射技術などについて解説がなされました。大学院生とともに少人数で熱心に英語を読み説く姿勢が見られました。

愛媛 中国・四国広域がんプロ養成コンソーシアム市民公開講座

第3回愛媛大学がんプロフェッショナル養成インテンシブコース講習会
第1回松山大学がんプロフェッショナル養成インテンシブコース講習会

日　時:平成29年11月5日(日)　14:45～16:00
場　所:愛媛県美術館　講堂
参加者:110名

座長:松山大学薬学部　教授　酒井 郁也

「iPS細胞を使ったがん治療について」
京都大学iPS細胞研究所　准教授　金子 新

終了報告

京都大学iPS細胞研究所准教授の金子新先生をお迎えして「iPS細胞を使ったがん治療について」と題した市民公開講座を開催しました。金子先生は、愛媛県松山市出身で、iPS細胞研究所山中伸弥教授の元で、iPS細胞を用いた遺伝子治療の研究をされています。先生はご自身が行っている細胞免疫療法の概要と、今後こういった治療が様々な癌に応用される可能性を、平易な言葉で解説されました。会場に訪れた方々は、iPS細胞がどのようにがん治療に貢献しているかを目の当たりにし、基礎医学の進展を直に感じる市民公開講座となりました。

山口 第5回 がん治療スキルアップセミナー

日　時:平成29年11月9日(木)　18:00～19:00
場　所:山口大学医学部霜仁会館3階　多目的室
参加者:23名

「苦しんでいる人を、放ってはおけない
～マザー・テレサに学ぶ緩和ケアの心～」
カトリック宇部教会　片柳 弘史 神父

終了報告

この度、カトリック宇部教会の片柳弘史神父をお招きし、「苦しんでいる人を、放ってはおけない～マザー・テレサに学ぶ緩和ケアの心～」と題してご講演いただいた。セミナーには、医師や看護師のほか保健師、薬剤師など様々な職種から23名の参加があった。

講師の片柳神父は、インドのコルカタにあるマザー・テレサの施設でボランティアをしていた際にマザー・テレサ本人から神父になるよう勧められ、その道を志した方である。セミナーでは、マザー・テレサはどのように苦しんでいる人々と関わったのか、ご自身の体験を交えながらお話いただいた。その中でマザー・テレサの残した言葉から、まず「あなたは愛されて生まれてきた、大切な人」という言葉を紹介された。片柳神父は続けて、マザー・テレサは、笑顔やキラキラ輝く瞳、相手の話を聴くこと、そして手のぬくもりといった全身でこのメッセージを人に伝え続けていたと語った。では、このメッセージを人に伝え続けるにはどうすればよいのか。それについてマザー・テレサは「あなたの命はかけがえのない命なんだというメッセージを伝えたいのならば、まず自分自身の命がかけがえのない命なんだということに気づきなさい」という言葉を残されたと紹介され、人は自分を愛するようにしか人を愛することができないとすれば、人を大切にするにはまず自分を大切にすることが前提にあると述べられた。この他にも、「愛されるために、自分と違ったものになる必要はないのです。ありのままで愛されるためには、ただ心を開くだけでいいのです。」や「大きなことをする必要はありません。小さなことに、大きな愛を込めればいいのです。」という言葉とともに、どのような心の持ち方が大切かを語られた。セミナーの最後には「まずは私たち自身が自分自身の人生を喜んで精一杯生きる、そういう医療者であってはじめて患者さんたちに生きる力を与えられるのです。」と述べられ、セミナーを締めくくられた。

徳島文理 徳島文理大学がんプロフェッショナル養成コンソーシアム市民公開講座

日　時:2017年11月10日(金)　19:00～20:30
場　所:香川県総合社会福祉総合センター7F　大会議室
参加者:45名

「がん治療・緩和ケア領域における薬剤師業務と臨床研究
:30年度改定や医療政策に関する動向もふまえて」
浜松医科大学医学部附属病院薬剤部　教授・薬剤部長
日本病院薬剤師会副会長・日本薬剤師会常務理事
川上 純一 先生

終了報告

がん治療における大学病院の機能が紹介され、Clinical Question(CQ)の抽出方法と問題解決の手法が解説された。CQを論文報告した具体例を提示し臨床研究の取り組み方について提示があった。また、医療行政の方向性、変容性が平成30年度保険改正に反映されることが解説された。

徳島 PHITS講習会

日　時：平成29年11月11日（土）　9:30～17:30
　　平成29年11月12日（日）　9:30～15:00
場　所：徳島大学蔵本キャンパス医学部基礎B棟1階　基礎第一講義室
参加者：31名

講師：古田 琢哉 先生（日本原子力研究開発機構）

1月11日（土）
■PHITSのインストール
■PHITSの概要説明
■基礎実習1-1（体系の作成方法）
■基礎実習1-2（線源の設定方法）
■基礎実習2（タリーの設定方法）
■基礎実習3-1（輸送計算に関する設定）

11月12日（日）
■基礎実習3-2（物理モデルの設定）
■総合実習（α線、β線、γ線、中性子線を止めるには？）
■医療応用実習（DICOM2PHITSの使い方）
■まとめと質疑応答

終了報告

本学で５回目となるモンテカルロシミュレーションの講義と実習を行った。今回は初級編で、シミュレーションの体系づくりがメインであり、放射線と物質との相互作用を理解する上で良い機会となり、大変有意義であった。

参加者からも、「理解しにくい物理現象のシミュレーションを行うことによって、放射線の挙動に対する理解が深まった。ただ、一部の内容が難しいため、今後も機会があれば、徳島大学で引き続き行っていただきたい」と感想が聞かれた。

山口 第6回 がん治療スキルアップセミナー

日　時：平成29年11月13日（月）　17:30～19:30
場　所：山口大学医学部霜仁会館3階　多目的室
参加者：23名

司会：山口大学大学院医学系研究科
　　保健学専攻　教授　齊田 菜穂子 先生

「がん緩和医療におけるトータルケア」
すえなが内科在宅診療所　院長　末永 和之 先生

終了報告

この度、すえなが内科在宅診療所院長の末永和之先生をお招きし、「がん緩和医療におけるトータルケア」と題してご講演いただいた。セミナーには、医師や看護師のほか保健師、薬剤師など様々な職種から23名の参加があった。

セミナーでは、在宅ホスピスの歴史やスピリチュアルペイン、緩和医療の観点からみた患者との関わりについて、先生の体験を交えながら分かりやすく述べられた。医療者ひとりひとりが緩和の心を持ち、実行していってほしいと述べられセミナーを締めくくられた。2時間のセミナー中、参加者は真剣に先生のお話を聞いており、大変有意義なセミナーであったと考える。

山口 第7回 がん治療スキルアップセミナー

日　時：平成29年11月20日（月）　17:30～19:30
場　所：山口大学医学部霜仁会館3階　多目的室
参加者：21名

司会：山口大学大学院医学系研究科
　　保健学専攻　教授　齊田 菜穂子 先生

「がん緩和医療における症状緩和」
すえなが内科在宅診療所　院長　末長 和之 先生

終了報告

この度、すえなが内科在宅診療所院長の末永和之先生をお招きし、「がん緩和医療における症状緩和」と題してご講演いただいた。セミナーには、医師や看護師のほか保健師、薬剤師など様々な職種から21名の参加があった。

セミナーでは、がん患者に生じる痛みの原因やメカニズムについて説明され、症状マネジメントについて具体的な例をあげながら述べられた。セミナーの後には活発な質疑応答もあり、大変有意義なセミナーとなった。

徳島 第45回 徳島大学薬学部卒後教育公開講座

日　時：平成29年12月3日（日）　15:30～17:00
場　所：徳島大学長井記念ホールおよび薬学部スタジオプラザ
参加者：212名

「癌の痛みをいかにして緩和するか？」
―モデル患者を用いた疼痛緩和シミュレーション―
千葉科学大学薬学部　非常勤講師　真野 徹 先生

終了報告

千葉科学大学薬学部非常勤講師の真野徹先生より「癌の痛みをいかにして緩和するか？」という内容について、1「患者さんが持つモルヒネへの不安」、2「モルヒネで鎮痛できる患者モデル」、3「モルヒネが効きにくい患者モデル」、等の項目に対し、具体的な事例、および治療法を挙げながら実践的内容の講演があった。

参加者からは「講師の知識・経験量とも膨大で、楽しんで聞くことができた」「実用的な講演だった」「非常にわかりやすくて面白い講演だった」という意見や「内容について実際に使えるもので、とても参考になった。プレゼンも素晴らしかった」という意見をいただいた。

岡山 第9回 歯科･口腔外科インテンシブコース

日　時：平成29年12月3日(日)　9：00～15：00
場　所：岡山コンベンションセンター2F　レセプションホール
参加者：88名

座長：岡山大学大学院医歯薬学総合研究科　口腔顎顔面外科学分野
　　佐々木 朗 先生
　　徳島大学大学院医歯薬学研究部　口腔外科学分野
　　宮本 洋二 先生

特別講演1「口腔癌切除後の機能的再建」
　　日本歯科大学名誉教授　又賀 泉 先生
特別講演2「地域中核病院における口腔がん治療の実際ー現状と限界そして今後は？ー」
　　福山市民病院　診療部次長　歯科口腔外科統括科長　目瀬 浩 先生
ワークショップ
『多職種連携でがん患者の食を支援する取り組み』
「当院栄養サポートチームにおける歯科連携について」
　　徳島大学病院　口腔管理センター　特任助教　高野 栄之 先生
「口腔がんの人の食と生活を支えるケア」
　　日本赤十字広島看護大学　特任教授　認定看護師教育室長　迫田 綾子 先生
「多職種協働で在宅がん療養者の『食べる楽しみ』を支援する」
　　まんのう町国民健康保険造田･美合歯科診療所　木村 年秀 先生

終了報告

特別講演1は、口腔癌切除後の機能的再建について、基礎的な事項から高度な症例提示に至るまで非常に明解で興味深い内容でしたので、学生をはじめ歯科医師･口腔外科医からもたいへんご好評をいただきました。特別講演2は、地域中核病院における口腔がん治療の実際と現状についての講演で、病院歯科に勤務する歯科医師、歯科衛生士、看護師にとってたいへん為になる内容でした。午後からのワークショップでは、多職種連携でがん患者の食を支援する取り組みについて、大学病院と病院歯科に勤務する歯科医師、摂食･嚥下認定看護師の先生にご講演をいただきました。そして、在宅がん患者の食と生活を支えるためには、多職種協働が必要であるものの、これを実践していくためには多くの課題がみつかりました。以上、すべての講演内容に関して、たいへん勉強になったと多くの参加者からご好評をいただきました。

山口 がん看護インテンシブコースⅡ

がん高度実践看護師WG講演会 in Yamaguchi

日　時：平成29年12月11日(月)　17：30～18：30
場　所：山口大学医学部霜仁会館3階　多目的室
参加者：22名

司会：山口大学大学院医学系研究科　保健学専攻　教授　齊田 菜穂子 先生

「がん患者のライフステージの様々なニーズに応える高度な看護実践の展開
　　～高齢がん患者の症状マネジメント～」
綜合病院山口赤十字病院　がん看護専門看護師　金子 美幸 先生

終了報告

この度、平成29年度がん看護インテンシブコースⅡがん高度実践看護師WG講演会in Yamaguchiを開催した。講師には、綜合病院山口赤十字病院がん看護専門看護師の金子美幸先生をお招きし、「がん患者のライフステージの様々な新ニーズに応える高度な看護実践の展開～高齢がん患者の症状マネジメント～」と題して講演を行った。講演会には、医師や看護師、臨床検査技師、薬剤師など多職種から22名の参加があった。

講演では、高齢の方の症状マネジメントについて、基本的な事項から具体的な事例までお話され、現場に活かせる内容であった。参加者の皆さんは現役のがん看護専門看護師によるお話を興味深く聞いている様子で、講演会後も活発な質疑応答があり盛会であった。

広島 実践的放射線治療人材育成セミナー

3次元水ファントム講習会(物理士･技師編)

日　時：平成29年12月16日(土)　9：50～17：10
場　所：広島がん高精度放射線治療センター
参加者：24名

講師：HIPRAC･広島大学　医学物理士　診療放射線技師(品質管理士)

開会の挨拶
講義Ⅰ　3次元水ファントムによる測定の基礎
講義Ⅱ　品質管理における3次元ファントムの活用例
講義Ⅲ　治療機導入時の3次元ファントムの使用例
実習　　3次元水ファントムによる測定実習
実習　　測定結果の解析･評価、全体討論
修了証授与、記念撮影
閉会の挨拶

終了報告

3次元水ファントムについての講義や実習が行われた。総勢24名の医学物理士、診療放射線技師の方々からの参加があった。

広島 第7回 悪い知らせを伝えるための コミュニケーション技術講習会 in 広島

日　時：平成30年1月7日(日)･8日(月)　10：00～
場　所：広島大学　基礎社会医学棟2階
参加者：8名

内容：講義2時間、ロールプレイ8時間

終了報告

がん治療を専門とする医師8名の参加者があり、講義2時間、ロールプレイ8時間の内容で2日間実施した。ロールプレイは、4名のファシリテーターがついて、ロールプレイの中で出てくる話題を、繰り返し参加者に考えてもらうよう進行された。

広島 広島大学病院がん医療従事者研修会

日　時：平成30年1月12日（金）　18：30～
場　所：広島大学病院　臨床管理棟3階　大会議室
参加者：35名

座長：広島大学病院　がん化学療法科　教授　杉山 一彦 先生

「がんゲノム医療の実装：がんゲノム診断ネットワークと新規治療開発への利用」
国立がん研究センター　先端医療開発センター
ゲノムトランスレーショナルリサーチ分野　分野長　土原 一哉 先生

終了報告
国立がん研究センター先端医療開発センターゲノムトランスレーショナルリサーチ分野分野長　土原一哉先生から「がんゲノム医療の実装：がんゲノム診断ネットワークと新規治療開発への利用」についてご講演いただき、質疑応答を行った。

広島 がん看護インテンシブコースⅡ

がん高度実践看護師ＷＧ講演会in広島

日　時：平成30年1月18日（木）　18：00～19：30
場　所：広島大学保健学科研究棟2階203
　　広島大学霞キャンパス
参加者：26名

がん患者のライフステージの様々な新ニーズに応える
高度な看護実践の展開
「米国における高齢がん患者を支えるケアシステムと看護」
CNS（専門看護師）、OCN（がん認定看護師）　朝倉 由紀 先生

終了報告
CNS（専門看護師）、OCN（がん認定看護師）朝倉由紀先生から「米国における高齢がん患者を支えるケアシステムと看護」についてご講演いただき、質疑応答を行った。

広島 第42回 広島大学病院放射線治療講演会

日　時：平成30年1月24日（水）　17：00～
場　所：広島大学病院　外来診療棟地下1 階
　　放射線治療センター カンファレンスルーム(HIPRAC中継)
参加者：16名

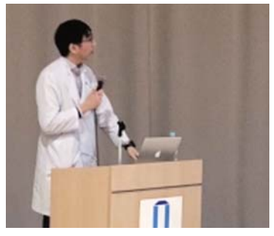
司会：広島大学放射線治療科　教授　永田 靖

「脳腫瘍に対する高精度放射線外部照射」
京都大学大学院　医学研究科　放射線腫瘍学・画像応用治療学　教授　溝脇 尚志 先生

終了報告
京都大学大学院医学研究科放射線腫瘍学・画像応用治療学 教授 溝脇尚志先生から「脳腫瘍に対する高精度放射線外部照射」についてご講演いただき、質疑応答を行った。

岡山 中国・四国広域がんプロ養成コンソーシアム

がん専門薬剤師養成・薬学分野講演会



日　時：平成30年1月26日　18：50～20：20
場　所：Junko Fukutake Hall
参加者：12名

座長：岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 疾患薬理制御科学
　　有吉 範高 先生

「第3期がんプロ薬剤師養成コースの概要紹介」
岡山大学医歯薬学総合研究科　医療教育統合開発センター
須野 学 先生

教育講演1
「癌治療における漢方」
岡山大学大学院医歯薬学総合研究科
岡山県南東部（玉野）総合診療医学講座　准教授　植田 圭吾 先生

教育講演2
「免疫チェックポイント阻害薬の作用機序－PD-1の基礎研究から」
岡山大学医歯薬学総合研究科　教授　田中 智之 先生

終了報告
第3期になるがんプロの専門薬剤師養成コースの照会、ならびにがん専門薬剤師に要求される基礎知識と臨床知識について基礎系教員は免疫学領域から田中智之教授が抗PD-1抗体の解説、臨床系教員は植田先生ががん化学療法時に漢方を用いた臨床研究の解説を行った。

Participation university

参加大学

Consortium　Member

広島大学
Hiroshima University

がん専門医養成コース
がん専門薬剤師養成コース
がん看護高度実践看護師養成コース
医学物理士養成コース
●霞地区運営支援部学生支援グループ
TEL:082-257-1538

川崎医科大学
Kawasaki Medical School

がん専門医療人養成コース
●事務部教務課
TEL:086-464-1012

岡山大学
Okayama University

がん専門医養成コース
●医歯薬学総合研究科等学務課教務グループ大学院担当
TEL:086-235-7986
がん専門職(がん専門・指導薬剤師、緩和薬物療法認定薬剤師)養成コース
●医歯薬学総合研究科等薬学系事務室教務学生担当
TEL:086-251-7923
高度実践看護師(がん看護専門看護師)コース・医学物理コース
●医歯薬学総合研究科学務課教務グループ保健学研究科担当
TEL:086-235-7984

山口大学
Yamaguchi University

外科系腫瘍専門医コース
内科系腫瘍専門医コース
放射線腫瘍専門医コース
がん看護専門看護師養成コース
●医学部学務課大学院教務係がんプロ事務室
TEL:0836-22-2055

香川大学
Kagawa University

がんプロフェッショナル養成コース
●医学部学務課大学院入学試験係
TEL:087-891-2075

松山大学
Matsuyama University

がん専門薬剤師養成コース
●薬学部事務室
TEL:089-926-7193

徳島文理大学
Tokushima Bunri University

臨床腫瘍薬剤師コース
●香川キャンパス教育・研究支援グループ
(がんプロ担当)
TEL:087-899-7100

愛媛大学
Ehime University

臨床腫瘍学教育課程がん専門医養成コース
●医学部学務課大学院チーム
TEL:089-960-5868

徳島大学
Tokushima University

がん薬物療法専門医養成コース・臨床腫瘍放射線医学コース
臨床腫瘍外科学コース・
臨床腫瘍栄養学コース(博士前期課程・博士後期課程)
●蔵本事務部学務課第一教務係
TEL:088-633-9649
臨床腫瘍薬剤師コース
●蔵本事務部薬学部事務室学務係
TEL:088-633-7247
高度実践がん看護学コース・医学物理学コース
●蔵本事務部学務課第二教務係
TEL:088-633-9009

高知県立大学
University of Kochi

APNコース
●教務支援部教育研究戦略課
TEL:088-847-8815

高知大学
Kochi University

がん専門医養成コース
がん専門薬剤師コース
●医学部・病院事務部学生課大学院係
TEL:088-880-2799

中国・四国広域がんプロ養成コンソーシアム　Vol.52

□ 編集兼発行者
中国・四国広域がんプロ養成コンソーシアム事務局
TEL 086－235－7023　info@chushi.ganpro.jp

□ 印刷所
有限会社 ファーストプラン